

審査員

代議員会代表・信大教育学部教授 中山裕一郎  
 常任委員代表 高遠中学校長 唐澤正吉

信濃毎日新聞論説委員 菊池公雄  
 幹事代表・長野ろう学校長 武藤誠治

▼ 総 評

平成21年度「教育研究論文、教育実践賞」の審査が終了しました。応募のお勧め、各教育会審査などでのさまざまなご協力、誠にありがとうございました。本年度総応募数は207、年々の増加が見られ、本当にありがたいことです。先生方の前向きな姿が感じられる応募の状況です。

応募内容ですが、昨年に続き「総合的な学習の時間」が多いわけですが、このような各領域別に分けられるものかどうかとても迷う、バラエティーに富んだ内容でした。

なお、「特別支援」は特別支援学校のみならず小・中学校の「発達障害児童」等の指導内容のものもまとめました。近年「特別支援」が多くなってきていることが特色でもあります。次に実践賞を担当したものとしてこの評価には現れていないことについて少しお話させていただきます。

まず、応募者ですが、教職2年目の先生から、講師の先生、若い先生、ベテランの先生、養護の先生、院内学級の先生、栄養士の先生、図書館司書の先生、事務の先生、教頭先生、校長先生と実に多様です。

グループについても様々な形で応募いただい

おり、校内の研究の多様化が伺えます。

レポート内容ですが、実践賞だから当たり前と言えば当たり前ですが、実に授業を工夫している、考えている、こんな授業なら、取り組みなら学校生活が楽しいだろうと思うものがいっぱいありました。

子どもたちに体当たりでぶつかっている先生方の姿、地道に実績を積み上げている先生方の姿、保護者の方とともに歩もうとする先生方の姿が実践賞を読ませていただきながら浮かんできました。

今、教育現場には厳しい批判の目が向けられがちですが、何とかその人たちにこの実践を知ってもらいたいと切実に思いました。

最後に審査員の先生方から、もう少し「特選、入選」の数が多くできないかの声がありました。それほど内容は充実し、拮抗していたということです。入選や佳作、奨励賞に分けるのに心が痛んだということも話題になったことを申し上げ、21年度教育研究論文・実践賞についての報告を終わらせていただきます。本当にご協力ありがとうございました。(審査委員長 中山裕一郎)

個人の部

答えは子どもにある

～子どもの学びの道筋を見取り、支援することで学習は成立する～

辰野町立川島小学校 永原美香

1学級5人という規模を生かし、一人ひとりの子どもに丁寧に目を配っている。すぐれた点は3つある。一つは「おやき」というなじみの深い素材を選んだことである。そのことによって、親や地域の人々の協力も得やすくなった。第2は、教師が自分の“非力”を自覚し、そこから子どもたちにかかわろうとしていることである。教師は「教え、導く」よりも、子どもたちに学び、ともに成長しようとしている。そんな教師は、子どもにとって最高の大人である。第3は、報告書の表現が優れていることである。若い教師の悩み、苦しみや喜びが、行間からにじみ出している。「待つ」という支援など、見出しもうまい。父母が読んでも、すっと胸に落ちることだろう。(菊池)

### 「資料の活用」領域における教材の開発に関する研究

～ PPDACを重視した授業実践を通して～ 長野市立柳町中学校 新井 仁

すっきりとまとめられ、主張すべきことが明確にわかるまことに見事な論文である。以前位置づいていた「資料の整理」と新学習指導要領で新設された「資料の活用」領域におけるねらいを深く分析してとらえ、最も重要であり困難な部分である「現実データの収集と利用」に焦点を当てて見事に教材化している。どこの中学校でも問題となる「朝のあいさつ運動」の充実のために、身近な登校時間の中に多様な分析すべき問題が内在していることに気づかせ、多様な個々の考えを引き出している。現実データを与える実践と問題の解決に向けて資料収集から実践に挑戦しその重要性和教材化の困難さを自分で再確認している点やフリーソフトSimpleHistの利用も魅力ある取り組みに輝きを増している。(唐澤)

## グループの部

### 職員が目標を共有して取り組む、小中一貫教育への道（4年間のまとめ）

大桑小・中学校 一貫教育推進委員会

子どもたちの正確な実態把握から具体的なデータを基にして小中一貫教育の大桑モデル構想を作成した。その中で「小学校5年生頃から変わりはじめ中学校1年生で問題が顕在化する」というとらえをし、義務教育9年間の発達段階を3期に分けてその特徴と課題を明確にした研究仮説を設定し指導を進めてきたが、その指導内容は小・中学校の枠を超え、地域をも巻き込んだ活動になっている。本論文はその活動の柱とした「いのちの学習」を中心にし、具体的な子どもたちの姿を通して4年間に亘って一貫教育の可能性について追及した継続性のある格調高い内容となっている。(武藤)

### 不登校対策の取り組み

長野市立東部中学校

勤務校における不登校生徒数が全国あるいは全県と比較して多いという実態の解決のために、学校をあげて取り組んだ真摯な実践研究である。綿密な調査、それを踏まえての支援体制の構築や取り組みの具体的な姿も広範で柔軟である。印象的であったのは不登校を「個々の子どもや家庭に原因を求める」のではないとしている点であり、問題を有する子どもを「困った子ども」として見るのではなく、「困っている子ども」として見ようという、不登校のとらえ方に対する学校側の一致した発想の転換と確認である。これらの結果として、不登校生徒の減少という目に見える成果も上げ得ている。今後に向けての課題についても述べられているが、このような研究は、他校における不登校生徒、あるいは問題行動を有する生徒へどう向き合うか、解決に向けてどう取り組むかという点で大きな示唆を与えらると思う。(中山)

\*特選・入選者の発表一覧は、各校に配布しました審査結果一覧表をご覧ください。

\*5月29日（土）開催予定の信濃教育会定期総集會開會式において、「特選」入選者への贈賞式を行い、代表者1名の発表を予定しています。

後援：長野県教育委員会・長野市町村教育委員会連絡協議会・長野県小学校長会・長野県中学校長会・長野県特別支援学校校長会・長野県高等学校長会・長野県PTA連合会・信濃毎日新聞社